

男性（30代）禁煙年齢・10代

私が喫煙していたのは今から十五年前、高校生の頃であるから、法律に違反していたことになる。十六歳から十八歳にかけてスパSPA吸っていたわけだが、罪の意識は全くと言っていいほどなかった。喫煙行為が発覚して退学になるのではないかと、との懸念もあったが、それを上回るだけの喫煙に対する衝動があった。それは「周囲から大人として認知されたい」という、極めて幼稚で純粋な願いである。

高校生（中学生）の喫煙の理由は今も昔もこれがトップにくるのではあるまいか。それ以外に煙草を吸うだけの合理的理由はなく、周囲の目と本人の過剰な自意識のみが喫煙行為をせき立てていた。喫茶店で紫煙をくゆらせながら教師達の批判を垂れ流していれば、その場では大人だったのである。少なくとも当時はそうであった。

時たま校内の掲示板に「退学処分」と書かれた貼り紙がしてあることがあった。私の学校は校則が厳しく、一度でも喫煙が発覚すれば即退学であった。私の高校では、暴力行為よりも、カンニングや無免許運転よりも、喫煙は悪だったのである。

学校側も規則を厳しくすれば喫煙に歯止めがかかると思って厳しくしたのだろうが、厳罰化によって高校生の「成熟に対する願望」を抑えることは出来ない。一度ポケットにセブンスターを入れて自転車を乗り回していた時、巡回中の警察官に捕まって（無灯火だった）しぼられたことがある。これによってもやはり喫煙を止めようとは思わなかった。大人からの規制は即ち、「自分が大人にとって脅威となっているからだ」という更なる自意識のエスカレートしか生まなかった。

そんな私だったが、高校を卒業するとピタリと煙草を止めてしまった。自販機を見ても何とも思わず、煙が漂ってきても、吸おうとも思わなかった。

私が煙草を止めることが出来たのは、「喫煙行為が大してカッコ良いものではない」と気付いたからである。なんてことのない理由だが、十代の男子にとってこれは重大なことである。ほとんどすべての行為は「カッコイイかカッコ悪

いか」で決定する年代にあって、「大してカッコ良くない」という理由は致命的ですらある。

ということは、である。周囲が「煙草を吸うことはイカしていることではない」との認識に立てば、未成年の喫煙は一気に縮小していくことになる。「お前、それカッコ悪いぜ」という友人からの言葉は、本人の行動に間違いなく制動をかける。法律違反です、とか、周囲に悪影響を与えます、といった理由では高校生は動かない。自分の行動が周囲の目から見てサマになっていない、という理由こそが、彼等に煙草を止めさせる原因になる。

健康に対する弊害を熱烈に訴えたところで、高校生には響かないだろう。彼等の肉体にはパワーが有り余っているのだ。健康そのもの、健康で当たり前といった彼等に、病苦に対する危険をいくら論じたところで、それほど効果がないのは当然とも言える。

私が煙草を止めることが出来たのは、中毒性を獲得する前だったからこそ可能だったともいえる。一旦それを獲得してしまえばそう易々と抜け出せるとは思えない。だからこそ、吸い始めの時期に制動をかけることが大切なのだと思う。「煙草を止める」というより「最初から吸っていない」のであれば、それがベストの筈である。そのようにさせるのは、「大人からの教育」ではなく、「同世代からのカッコ悪さの指摘」が最大のポイントであろう。

私には完全に中毒になってしまった人へのアドバイスは出来ない。だが、吸って間もない未成年を、泥沼の手前から引き返させることは出来る。多感な時期だからこそ、喫煙行為は発生するのであり、多感だからこそ、それを止めさせることも出来るのだ。

「煙草を吸う姿ってなんかダサイ」

そのような言葉が友人や女子から一斉に噴出したとき、十代の男子の喫煙は大幅にダウンすることだろう。